

オンライン型言語能力評価の多様化とプロジェクト型学習の作品の 電子出版化実践報告

高倉（林）あさ子、バイアロック知子（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）

Report on online assessments in JWL classrooms in the US and the process of creation of open educational resources (OERs)

Asako Hayashi TAKAKURA, Tomoko BIALOCK, University of California Los Angeles

要旨：本稿では、初めにこれまでの日本語教育におけるオンライン型試験の有効性を論じた先行研究を考察する。そして COVID-19 パンデミックが北米の日本語教育にもたらした影響の中で、授業内容と評価方法の変化に関するアンケート調査の結果を発表する。さらにこの調査結果と先行研究をもとに、遠隔授業における学習者の言語活動とプロジェクト型学習の効果を論じ、今後の高等教育における日本語教育のカリキュラムの再構築を提案する。パンデミック後のニューノーマルに活かすべき、総合的言語力の向上を目指した「プロジェクト型学習（PBL）」の具体例と PBL の要となるプロジェクトの成果（学習者の作品）の電子出版化の過程を紹介する。

キーワード：プロジェクト型学習 (PBL)、 オンライン評価、 Open Education Resources

1. はじめに

2020 年の COVID-19 パンデミックにより、全米の大学は 2020 年 3 月からキャンパスを閉鎖し、遠隔授業となった。その直後から、全米の日本語教師会で ZOOM を授業で使用するための勉強会や教師間でオンライン教材を共有するサイトの紹介などが活発に行われるようになった。各地の勉強会で、最もよく出た質問は「従来の対面授業で行っていた教室内活動や試験・評価をどのように遠隔授業で同じようにできるか。」というものであった。この問いに、パンデミック以前からオンラインによる遠隔授業や評価をおこなっていた日本語教育者の有志が「オンラインによる遠隔授業の実践例」を紹介し、従来の筆記試験では測れなかった包括的な言語評価を提唱している。また全米日本語教育学会(AATJ)が COVID-19 パンデミックの影響の実態を把握するための調査を行い、結果を発表した。筆者は、この全米調査の前後に、北米一地域の日本語教師を対象とした教室内活動と評価方法の変化に関するアンケート調査を実施した。

「オンライン型テストの可能性と妥当性」「オンライン型口頭試験の開発とこれまでの歩み」を先行研究として分析した結果、「プロジェクト型学習（PBL）」が包括的な日本語力の向上に有効であるという考えに至った。PBL で重視される成果の可視化のために、図書館司書との協働作業で学習者の作品を電子出版することにした過程を通し、現場教師に必要な基礎知識の重要性も論じたい。

2. 先行研究

北米の高等教育における外国語としての日本語教育では 90 年代初頭からコミュニケーション型アプローチが取り入れられ、日本語学習者は『モデル会話』を通して語彙、文法、話の型などを学習することが一般的となった (Geyer, 2010)。北米の教育現場では American Council on the Teachers of Foreign Languages (ACTFL) が外国語学習者の口頭能力評価のガイドラインを 1986 年に発表し、90 年代初頭から学習の熟達度を筆記試験で測らず、何が実際にできるようになったかを測定する評価の有効性が論じられていた (Linn et al, 1991)。しかし外国語教育の現場では、日本語も含め、依然として文法中心の筆記式の試験で学習者を評価することが主流であった (Backman & Palmer, 2010)。筆記式の試験では学習者の「手書き」による文字習得を測ることが容易であったが、このような従来の筆記試験による評価法は学習者の「記憶力」を測るという点では有効だが、総合的なリテラシーの熟達度を測る上で、既習の単語や文字（漢字など）を正しく使用し、目的に合った文章を産出する能力を測る上では様々な課題があった。

Hayashi et al (2003) は Web-base(オンライン) 型と筆記式の日本語試験の結果の相関関係を基にオンライン型言語試験の妥当性と有用性を論じた。この研究では Backman & Palmer(1996) の理論的枠組みを採用し、オンライン型の試験がより実生活でのタスク遂行に近い形で提供できるような方法を提案していた。

高倉 (2012) は従来の印刷型の試験の問題点と限界を指摘し、オンライン型日本語試験の自動採点と印刷型の試験結果との相関を量的分析した結果、両試験の結果の相関が強い場合、利便性の高いオンライン型試験を有効活用すべきだと主張している。さらに高倉 (2015) は Learning Management System (LMS) と共に開発された PoodLL を使用したオンライン型口頭試験の実践報告の中で、より妥当性の高い口頭試験の実施に向けてオンライン型の口頭試験の具体例を紹介している。全米外国語教育協会 (ACTFL) は中等教育 (5 年生から 12 年生) のためのオンライン型口頭試験、Assessment Performance toward Proficiency in Languages (AAPPL) を開発し、日本語試験も 2018 年より施行されている。

これまでも学生数が多い州立大学の外国語科ではオンライン型の試験やハイブリッド型の授業形態が開発されていたが、高等教育では「オンライン授業」の実施に反対する声も多く COVID-19 のパンデミック以前にはオンラインによる外国語学習は大学の授業ではあまり普及していなかった (Tohsaku, 2021)。その反面、ここ数年は、従来の対面での講義は教室外で予習し、教室内では学習者が知識を実践に移し積極的に言語活動をおこなうよう反転授業のスタイルが推奨され始めていた (Bergman & Sams, 2012)。

全米日本語教育学会 (AATJ) と国際交流基金ロサンゼルス日本文化センター (JFLA) が 2021 年 2 月におこなったパンデミックがもたらした影響についての実態調査の結果によると、大学レベルの遠隔授業ではオンラインによる同期型の授業をおこなった大学は 40.3% で非同期型と同期型の組み合わせで授業をおこなったのは 21.8% で合計 60% ほどの大学の日本語コースは対面ではなく遠隔で授業をおこなっていた。パンデミック以降も履

修者数が減少していないという回答は大学レベルで 72%（すべて同期型）から 89%（同期・非同期型の組み合わせ）と高い割合で、パンデミック禍でも全米で日本語を履修する学生数が維持できていたようだ。遠隔授業が学生の学習にどのように影響を与えたかに関しては、パンデミック以前と変わらないという回答が大学レベルでは 48.4%、低くなったという回答が 42.7%だったということだ。大学レベルで学生の学習レベルが低下したと回答した中で、話す力(speaking)が下がったという回答が 48.6%で最も高かった（Saito-Abbott, Mori, Takehara 2021）。

これらの先行研究から、COVID-19 パンデミック前後により、授業形態や評価方法が急激に変化する中で、これまで以上に総合的な言語能力評価が急務であることがわかった。

3. 言語能力評価方法の調査

3.1 調査手順と参加者

2020 年の COVID-19 パンデミック前後のオンライン型言語評価の実態を把握するため、2020 年 5 月と 2021 年 5 月に、アメリカ西海岸地域で開催された日本語教師を対象とした勉強会の参加者にアンケート調査を実施した。アンケートは各回、50 名程度の参加者に Google Form を送り、回収率は約 50%であった。2020 年 5 月の回答者は 24 名で 2021 年 5 月の回答者は 27 名であった。2020 年と 2021 年の勉強会の両方に参加していた参加者は 6 名いたが、この 6 名の 2 回目の回答はデータには含まれていない。

3.2 調査結果

アンケートの質問 10 項目のうち、5 問は「はい」か「いいえ」の二択式で 5 問は複数回答を可能にした選択式であった。さらにアンケートの最後に自由回答式で「コロナ禍の授業のオンライン化で問題になったことや解決法など」を共有できる問いを設けた。結果は以下の表にまとめたが、オンライン授業が始まったばかりの頃（2020 年 5 月）と 1 年余りが経過した時期（2021 年）では回答に大差がなかったため両結果を累計し表した。

表 1：アンケート結果（二択式）

二択式質問事項 (N=45)	回答（はい）	回答（いいえ）
1 オンライン授業になって授業内容を変えた	34	11
2 オンライン授業で授業参加度が低くなった	29	16
3 オンライン授業で試験の方法を変えた	44	1
4 オンライン授業で準備時間が増加した	43	2
5 オンライン授業で採点時間が増加した	38	7

表 2：アンケート結果（複数選択式）

選択式質問事項 (N=45)	選択項目			
授業内容の変化で少なくなった活動は何か (複数回答可)	話す	聞く	読む	書く
	30	11	23	11
試験方法の変化（自由回答もあり）	試験監督の有無		紙からオンライン	
	42		28	
試験方法の変化で正しく評価できなくなった項目は何か（複数回答可）	口頭	聴解	文法	漢字
	23	9	37	41
オンライン授業になり準備に時間がかかるものは何か（複数回答可）	教案	宿題	動画	技術
	27	22	26	39
オンライン授業になり、採点時間が増加した項目は何か（複数回答可）	口頭	作文	漢字	語彙
	18	27	10	8

授業が対面から遠隔（オンライン）に移行し、授業内容を変更したと回答した中で、具体的には進度を緩めたり、授業内での口頭練習の時間を減らしたりしたという報告があった。また教室内と異なり、試験監督が困難であることから従来の教室内でおこなっていた単語や漢字の小テストは、時間制限を決めてオンラインで行うなどの変化が報告された。口頭試験に関しては、北米の外国語としての日本語教育では全米外国語教師会（ACTFL）の言語運用能力ガイドラインを使用し、個別インタビューで言語運用能力を測る方法を評価に取り入れている実践例がパンデミック前からあった。従来は対面で、教師と学習者が1対1で対話する方法が主流であったが、遠隔授業に移行してからは ZOOM などを利用して比較的、簡単に移行ができたようだ。しかし前述の通り、手書きによる筆記試験で学習者が記憶してきたものを時間内に回答する形式の小テストは、試験監督がいない遠隔授業の場では、従来と同じようにできないという意見が現場教師から多く出された。遠隔授業が始まった当初は Respondus 等のオンライン上試験監督システムの導入を検討したプログラムもあったようだ。しかしプライバシー保護の問題から、実際に導入し活用している報告はほとんどなかった。遠隔授業の期間中は、学生の評価を可・不可(Pass/Non Pass)の2段階にするなど評価の緩和を推奨した大学もあったと報告された。そのような状況下で、どのように学習者の学習意欲を維持し、総合的な言語能力を高めるべきかを模索するコメントがアンケート内にも見られた。

4. プロジェクト型学習(PBL)の実践例と評価方法

4.1 COVID-19 パンデミック以前のプロジェクト型学習

筆者の所属大学では初級学習者のクラス内活動として、既習事項を用いて会話するグループ口頭発表やプロジェクト学習が行われていた。学習者は授業が非対面になる以前か

ら、PBL の活動では Google Doc やテキストチャットを利用し、教室外でも日本語による言語活動を自主的におこなっていた。PBL の中上級レベルの活動として 2018 年秋学期と 2019 年冬学期に「リレー小説」プロジェクトを試行した。リレー小説を学生に書かせることにした背景には日本語学習者の読解力と現存の出版物とのギャップを埋めるという目的があった。筆者の所属大学には日本語の多読コレクションがあり、1000 冊以上の蔵書がある。日本語学習者は通常の授業内で扱われる読解教材以外に図書館で自由に多読ができる環境であった。しかし 4 年目の上級読解クラスに登録した学生の多くは言語能力と認知能力のギャップから「読みたい本が読めない」というジレンマがあった。そこで学習者が自分の言語能力に見合った文体、語彙を使って小説を書き、お互いに読み合うことによって読解能力を高め、日本語での読書に親しめることを目的としたプロジェクトを考えた。このプロジェクトはすべて教室外活動としておこなわれたが、グループプロジェクトであるため、学生同士はオンライン上でプロジェクトを遂行した。完成された作品は次年度の学生の見本として印刷し、図書館の多読コレクションに加えてもらえるよう相談したところ、図書館司書の協力のもと、電子出版が可能となった。

4.2 COVID-19 パンデミック以降のプロジェクト型学習

前述のプロジェクトの作品は COVID-19 パンデミックでキャンパスが閉鎖される以前に電子出版されたが、結果的にこの出版形態は図書館で多読ができない環境下でもアクセスが可能であったため非常に有益であった。筆者の所属大学は 2020 年の春学期の直前からオンラインによる遠隔授業が開始され、2020-2021 年度の授業は 1 年間すべてオンラインで行われた。2020 年の春学期は最終学期であり、初級、上級ともに期末プロジェクトが計画されていた。当初は ZOOM による授業でのマイクやカメラの使用、さらに学習者の居住地との時差によるグループ活動の困難さなどが懸念され、グループプロジェクトが遂行できるかどうか不確かであった。しかしオンラインによる遠隔授業になる前から、学生はグループ内で最適のコミュニケーション方法を確認し合い、時間を決めてプロジェクト活動をおこなっていたことから、教室外活動が中心となるプロジェクトは COVID-19 パンデミック禍でも可能であると判断した。初級の学年末プロジェクトは対面授業の時と変わらず「アニメ・ドラマ吹き替えプロジェクト」を試行した。学生は遠隔で各々が自分の役を演じる必要があることから、音質や編集技術は評価の対象としないとして制限のある状況下で最善を尽くすように指導した。このプロジェクトワークは遠隔にいる学生間のつながりが強化でき、学生からの評価も高かった。上級のクラスはスピーキングに特化したクラスであったため、小説ではなく脚本を書くプロジェクトを行なった。

2020-2021 年度では初級で「宮崎駿のスタジオジブリ絵カードを使用して教材を作るプロジェクト」と「アニメ・ドラマ吹き替えプロジェクト」を行なった。上級クラスでは前年度に引き続き「ドラマ脚本制作プロジェクト」を行なった。前年度の経験とアンケート結果をふまえ、プロジェクト型活動をカリキュラムに多く取り入れた。オンライン上で学

生同士が協働作業をおこないやすいプロジェクトとデジタル教材として将来の学生に役立つものを制作するプロジェクトを通し、学習者の遠隔授業への積極的参加を促した結果、学習効果が上がり、満足度も高い結果となった。

4.3 プロジェクト型学習(PBL)の評価

文法や語彙の学習を主目的とした授業では、筆記試験が成績の大部分を占め、プロジェクト型のアクティビティは評価の対象にしない傾向があった。また口頭試験やパフォーマンス評価は採点者間信頼性が問題となることがある。日本語教師の勉強会では常に PBL の成果（作品）をどのように評価しているかという質問があった。また作品を出版するにあたり、教師がどこまで添削するかという質問もあった。PBL では学習の過程を評価し、学習者が自主性を持ってタスクを遂行していく課題が必要となる。教師はその過程を観察し、学習が促進されるよう個別指導をしながらプロジェクトを進めていく。PBL が単なる課外活動とならないよう採点基準をシラバスに明示し、数回の個別指導を授業内活動に入れることにより、質の高いプロジェクト活動が可能となった。

5. プロジェクト型学習(PBL)の作品の電子出版化

言語教育でプロジェクト型学習の実践を行なっている例は数多く、日本語教育でも学生の作品を学部や教員個人のホームページ(HP)で紹介している例を見つけることができる。このような個人レベルでの電子出版は容易ではあるものの将来的に教材としての使用を考慮した場合にはふさわしくないと考えた。そこでプロジェクト型学習で最も大切な要素の一つである「学習者の所有権の認識」に重点を置き、正式に出版できる方法を模索した。

前述のように筆者の所属大学は東アジア研究専門の図書館があり、日本人司書である筆者が、日本学研究だけでなく日本語学習者のための書物の選択を行い、日本語多読文庫を設立した。当初の学生の作品の出版の目的は、将来の日本語学習者が自分のレベルに合った小説を楽しみながら読めるようにすることであった。そこで多読文庫に学生の作品を加えようと企画し、Open Education Resources (OER)を専門とする司書の協力のもと、電子出版が可能となった。OER は教育に関するコンテンツを共有することを目的としている。OER は教育に関する資料を無料で誰でも利用でき、ライセンスの下で再編成や再配布も可能である。本稿で紹介した日本語学習者による「リレー小説」は Creative Commons (CC) License の 6 種類の利用条件のうち、CC BY-SA（表示—継承）を選択した。これは、利用の際に原作者のクレジットと改変後の作品を同じライセンスでの公開することを条件とするものである。このライセンスが提示された承諾書により、作者である学生は自分たちの作品が他者に共有されることを正式に承諾し、また図書館が作者に代わって作品を出版する権利を有することになった。学生の作品の中には本人が制作していない写真や挿絵が使用されていたが、それぞれの作品を自分の著作として出版するに当たり、本人が

作成したものに差し替えた。この過程を経て、筆者の所属大学のレポジトリサイトに掲載することにした。

この一連の作業の過程で、卒業後の学生からの承諾書を得ることが非常に難航したため、翌年の「脚本プロジェクト」を取り入れた授業では司書が学生に30分の講義をおこなった。講義の内容は著作権の重要性、大学の図書館から正式に出版するために必要な書類（承諾書）やパブリックドメインの定義であった。学生はプロジェクトで作成した作品が将来、出版される可能性があることを理解し、コース終了時までには承諾書を提出した。この「リレー小説集」は2021年6月現在、1000件余りの閲覧数があり、200件ほどダウンロードされている。今年の秋には「グループ脚本集」の出版も予定している。

6. まとめ

アメリカの新型コロナ国家非常宣言が発令されてから15ヶ月間、オンラインによる遠隔授業が続く中、筆者の所属大学では、日本語学習者数は増加し、授業内外活動はそれまでの対面授業と同じ進度と課題の量で遂行された。学生のコースの評価は全体的に非常に高く、中でも学生同士のつながりが持てたとしてプロジェクト活動は高評価であった。遠隔授業に移行した直後は、技術面の知識の不足や学習環境の困難さなどにより、進度を緩めたり、試験回数を削減したりするべきかという議論もあった。しかし通常の対面授業で行われていたことをそのままオンラインに移行するよりは、オンライン授業の利点を活かした課題やプロジェクト型学習と総合評価を取り入れることにより、COVID-19パンデミック以降のニューノーマルでも持続すべき言語教育の方向性が見えてきたと言える。

参考文献

American Council on the Teachers of Foreign Languages (ACTFL)1999. ACTFL proficiency guidelines. American Council on the Teaching of Foreign Languages.

American Council on the Teachers of Foreign Languages (ACTFL) Assessment Performance toward Proficiency in Languages (AAPPL).

<https://www.actfl.org/assessment-research-and-development/actfl-assessments/actfl-k-12-assessments/actfl-assessment-performance-toward-proficiency-languages> 6/23/2021

Backman, Lyle, F. Palmer, Adrian, S. 1996. Language testing in practice: Designing and developing useful language tests. Oxford: Oxford University Press.

Backman Lyle, F & Palmer, Adrian, S. 2010. Language Assessment in Practice. Oxford: Oxford University Press.

Bergman, Jonathan. Sams, Aaron. 2012. Flip your classroom: Reach every student in every class every day. International Society for Technology in Education, Washington DC.

Geyer, Naomi. 2010. Japanese language teaching: a communicative approach. International Journal of Bilingual Education and Bilingualism. 13. P. 739-741.

Hayashi, Asako. Franworth, Tim. Haga, Yuko. Kamei, Greg. and Sawaki, Yasuyo. 2003. Development of Web-based language placement test. The 11th Princeton Japanese Pedagogy Workshop Proceedings, P.151-169

Linn, Robert L. Baker, Eva. and Dunbar, Stephen B. 1991. Complex, Performance-Based Assessment: Expectations and Validation Criteria. American Educational Research Association, Vol. 20. No. 8, P15-21

Saito-Abbott, Yoshiko. Mori, Junko. Takehara, Ryo. 2021. Impact of the Covid-19 Pandemic upon Japanese Language Education in the US: The Report of the Initial Results of the Spring 2021 AATJ/JFLA Survey. Presented at the AATJ spring conference. 3/24/2021

Tohsaku, Yasu-Hiko 2021. Japanese Language Education in the Next Normal- We Won't Teach Japanese. Online workshop by American Association of Teachers of Japanese.
<https://www.youtube.com/watch?v=qnKNS18Iw50> 4/17/2021

高倉（林）あさ子 2012. 「ムードルを使用したオンライン型総合テスト開発」 『2012 Castel-J デジタル予稿集』
https://ccle.ucla.edu/pluginfile.php/3290431/mod_resource/content/0/CASTEL-J%202012Moodle%20%28in%20the%20Proceedings%29.pdf

高倉（林）あさ子 2015. 「ブールドルを使用したオンライン型口頭テストの実践」 『2015 Castel-J デジタル予稿集』
https://ccle.ucla.edu/pluginfile.php/3290433/mod_resource/content/0/CATEL-2015%20PoodLL%20%28in%20the%20proceedings%29.pdf

電子出版サイト

The Collection of Creative Writing By Learners of Japanese リレー小説集
https://escholarship.org/uc/item/sf276dj#article_main